

クマの生態と出没状況の傾向、及び森林管理

○福島大学 食農学類 望月 翔太

【はじめに】

ツキノワグマ（以下、クマ）は、日本列島の広い範囲に生息する大型哺乳類であり、古来より狩猟対象となるなど日本人との関わりが深い動物である。近年、福島県内におけるクマの推定個体数は増加傾向にあり、2024年度には約5,000頭（中央値）と推定されている。これに伴い、人里への出没や捕獲数も高い水準で推移しており、地域社会における軋轢が深刻化している。本報告では、クマの生態的特性と近年の出没傾向を概観し、特に被害対策としての森林管理（緩衝帯整備）の有効性について、実証事例を交えて報告する。

【近年の出没状況と生態的要因】

クマは雑食性で、春は山菜、夏は昆虫やキイチゴ、秋はドングリ類を主食とする。特に秋の堅果類の豊凶は、脂肪蓄積が必要な冬眠前の行動や、着床遅延という繁殖特性を持つ翌年の出産数に大きく影響する。2025年度の福島県内における出没状況は極めて特異であった。例年であれば出没が落ち着く10月において、目撃件数が556件と過去4年平均の約22.2倍に達した。この要因として、個体数の増加に加え、猛暑や餌資源の不足により、冬眠前に餌を求めて人里周辺での活動が活発化したことが考えられる。

【森林環境と出没リスク】

県内の景観構造（ランドスケープ）を分析すると、地域ごとに異なる特徴が見られる。会津地方は森林が連続する「緑のカーペット」、中通りは隠れ場と餌場が隣接する「パッチワーク」、浜通りは森林が回廊状に街中まで伸びる「迷路」のような構造をしている。いずれの地域においても、クマは森林と人里の境界（林縁部）を利用する傾向がある。特に、耕作放棄地や管理不足により藪が茂った場所は、クマにとって安全な隠れ場所となり、不意の遭遇事故を誘発する高リスクエリアとなる。

【森林管理（緩衝帯整備）の有効性】

人身被害防止には、人の生活圏と森林との間に見通しの良い空間（緩衝帯）を確保することが重要である。三島町における実証調査では、出没エリアにおいて下草刈りによる緩衝帯整備を実施し、カメラトラップを用いて動物の出現頻度（RAI）の変化を検証した。その結果、クマに関しては出現頻度が統計的に有意に低下した。これは、警戒心の強いクマが、身を隠せない開けた場所を避ける習性を持つためであると示唆される。

【おわりに】

個体数の増加や生息域の拡大により、今後もクマ問題は継続すると予測される。被害を未然に防ぐためには、錯誤捕獲個体への学習放獣といった対症療法に加え、集落周辺の藪の刈り払いなどの環境管理を継続的に行い、クマが近寄りにくい環境を維持することが不可欠である。